

2022年6月26日(日)／説教者：國分美生

説教：「平和のパン種」

聖書：ルカによる福音書13:18～21

イエスが福音を伝えた相手は、地位も名誉もなく、経済的にも恵まれず、社会の隅に追いやられていた人々でした。当時のイスラエル社会はほんの一握りの、社会的にも宗教的にも力を持つ男性たちが支配していて、神の国は、そのように恵まれた力のある者たちだけに開かれているという考え方でした。力のある男が人間の完成形で、それ以外は劣ったものであるとする価値観の中で、マイナスのイメージがある女性が、人々が待望する神の国の譬えで使われることなど前代未聞のことでした。

もう一つ、人々が聞いてびっくりしたのが、「パン種」という言葉が出てきたことです。パン種は発酵したパン生地の一部を取っておいて暗い湿ったところにおいて腐らせたものです。そのため、パン種というのは、腐敗や悪を象徴する、否定的なイメージで語られることが度々ありました(マルコ8章15節等)

神の国は聖なるものという、これまでの常識や期待がひっくり返る、びっくり仰天の話に困惑する人もあったでしょう。何が不浄で、何が聖いのか。何が正しく、何が悪なのか…それは社会で当然とされている価値観を根底から覆すイエスの問いかけでした。しかしその価値観のひっくり返しが、貧しく、声を聞いてもらえず、社会の隅に追いやられていた人々にとっては福音でした。

もう一点、パン種の譬えから共有したいイメージがあります。3サトンは34キロです。明らかに大量ですが、この譬えを聞いた当時の人々は当時の習慣のように、共同体の中庭でみんなでわいわいと大量の粉をこねてパン作りをしているイメージを思い浮かべたことでしょう。女性たち、男女の奴隷たち、その他さまざまな貧しい庶民の人々が共同で参加するパン作りの労働が、神ご自身の働きの象徴としてここに語られています。

神の国はこんなふうに、人々が予測もしなかった仕方で、しかし確実に広がっていくのだということを、私たちはこの聖書の箇所から確信します。それは世の中で力と富を持つ支配者層によるものではなく、力がない者、取るに足らないものとみなされている人々の共同作業によります。私たちが実際に生きているこの社会のなり方とは逆の形で、神の国は実現していく。神の国は私たちの社会の固定されてしまった常識をくつがえし、社会に変革を起し、膨らみ、広がっていくとイエスは言うのです。(國分美生)